様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ８ 月 ３０ 日現在

機関番号：３２６４２
研究種目：研究活動スタート支援
研究期間：2016～2017
課題番号：１６Ｈ０７２０８

研究課題名（和文）小学校英語教育におけるプロジェクト重視の英語学習の可能性

研究課題名（英文）The possibility of Project-Based Approach in Elementary School English Education

研究代表者
白土　厚子（Shirado, Atsuko）

津田塾大学・学芸学部・助教

研究者番号：９０７８２７４８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,300,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究は小学校新学習指導要領の外国語の目標となる4技能によるコミュニケーション能力の基礎的資質・能力の育成へのプロジェクト重視の英語学習の可能性を探ることであった。プロジェクト重視の英語学習の基となるProject-Based Approach (PBA)の長所を生かし、すべての活動がトピックに関連づけられ重層的にゴールにつながり、児童にとってゴールを達成するための意味のある「読む書く」学習となるようデザインした12回の英語活動を初めて「読む書く」活動を体験する6年生68人に行った。
　量的質的分析結果からプロジェクト重視の英語学習は、4技能統合のための指導方法として有効であることが示された。

研究成果の概要（英文）：　This study’s aim was to investigate how English lessons based on the Project-Based Approach (PBA) influenced Japanese elementary school students trying to attain the objectives of the new government guidelines. The participants was 68 sixth graders who had not learned how to read and write English. To attain this aim, the researcher designed 12 English lessons, in which all activities were related to the project's topic in a multilayered structure and the students could be engaged in meaningful reading and writing learning by creating a framework applying the PBA's characteristics to the English lessons.
　The findings obtained from qualitative and quantitative data analysis in this study demonstrated that these English lessons based on the PBA could be effective to teach English through reading and writing as well as listening and speaking to the sixth graders in an integrated manner.

研究分野：英語教育

キーワード：小学校英語　プロジェクト重視の英語学習　読み書き指導　ティームティーチング　4技能統合

1. 研究開始当初の背景

(1) 平成 23 年度より外国語活動が必修化されすべての 5, 6 年生児童に英語活動が保障された一方、児童が「聞く・話す」だけでは学習内容に物足りなさを感じる傾向や地域や学校による指導内容や質のばらつきが指摘されていた (文部科学省, 2014)。

(2) 平成 32 年度完全実施となる小学校新学習指導要領 (文部科学省, 2017)では、現在高学年に実施されている「聞く・話す」中心の外国語活動は中学年に引き下げられ、新たに 4 技能 5 領域 (聞くこと、読むこと、話すこと［やり取り］、話すこと［発表］、書くこと) を学習内容とする教科としての外国語が定められる。緊急の課題は、児童の認知的発達や指導格差、担任の長所を考慮した実践的英語教育アプローチの開発であった。

2. 研究の目的

(1)ゴール達成に向けて学習者に選択・決定の機会を与え、調べ学習や話し合いを通して様々な課題に協働で取り組む Project-Based Approach (Fried-Booth, 1986) (以降 PBA) に基づくプロジェクト重視の英語学習が 4 技能による「コミュニケーションを図る基礎となる資質・能力を育成する」という新学習指導要領の外国語の目標達成やそのための児童のコミュニケーションを図ろうとする態度育成に効果的かを調査した。

(2) 特に具体的データに基づいた実践結果から、プロジェクト重視の英語学習が児童の意欲・自信を高め、「読む・書く」を加えた 4 技能統合に効果的かその可能性を検討し、得られた知見から小学校英語教育指導法のさらなる改善を目指した。

3. 研究の方法

(1) 本研究は小学校 6 年生 (約 65 人) を対象に平成 28 年に第 1 次調査として、*Hi, friends!* 2 のトピックと言語材料を生かした 12 回のプロジェクト重視の英語活動「自分の行きたい国を発表しよう！」を実施した。第 1 次調査のデータを基に、4 技能統合を目指し「読む・書く」指導を取り入れ、指導案、教材、さらに分析方法を検討修正し、平成 29 年 1 学期に 6 年生 (約 68 人) に「読む・書く」指導を加えて修正した 12 回のプロジェクトを平成 28 年同様、担任と研究代表者がティームティーチングで実践した。ゴールとなる 11 回目の留学生との交流会では、児童が調べ学習で得た情報を基に英語で自分の行きたい国とその理由を発表し、留学生からコメントをもらった。

(2) 指導案は、①すべての活動がトピックに関連づけられ重層的にゴールにつながり、②児童にとってゴール (留学生に英語で行きたい国を発表する) を達成するための意味のある「読む・書く」学習となるよう PBA の枠組みに基づき作成した。

(3) プロジェクトの事前事後で量的･質的データを収集し、①～⑦の分析方法を実施した。①「聞くことクイズ」(聞く力)【t 検定】②「活動アンケート」(聞く話すことへの意欲・自信)【因子分析、t 検定】③「Can-Do 自己評価アンケート」(話すことへの状況的自信)【因子分析、分散分析/単純主効果分析】④「読むこと書くことアンケート」(読むこと書くことへの自信)【因子分析、分散分析/単純主効果分析】⑤「アルファベットクイズ」(アルファベット文字認識、事後のみ)【平均到達度 %】⑥「振り返り」(児童の自己評価、毎回の授業)、「行きたい国アンケート」(児童の自己評価、自由記述、事後のみ)【KJ 法的分析】⑦「担任アンケート」(担任の評価、自由記述、事後のみ)【KJ 法的分析】

4. 研究成果

(1) 分析結果

①「聞くことクイズ」では、事前事後 1% 水準で有意な効果が認められた (t (61) = 10.72, p

< 0.01)。Cohen (1992) に基づいた分析では、効果量大を示した (r = 0.81)。Cronbach's alpha は 0.78 で 0.7 以上とする Muijs (2011) の信頼性分析の基準を満たした (表 1 参照)。

表 1：「聞くことクイズ」*t* 検定

6 年生	事前		事後	
人数	平均	標準偏差	平均	標準偏差
62	8.98	5.49	15.34	5.53

	差の 95% 信頼区間		
t	下限	上限	r
10.72**	-7.54	-5.20	.81

注記：** は p < .01 で有意差があることを示す

満点は 20 点

②「活動アンケート」では、因子分析の結果 1 因子と判明。*t* 検定の結果、事前事後 1% 水準で有意な効果が認められた (t (61) = 8.91, p < 0.01)。効果量は大を示した (r = 0.75)。信頼性分析は 0.83 Cronbach's alpha だった (表 2 参照)。

表 2：「活動アンケート」*t* 検定

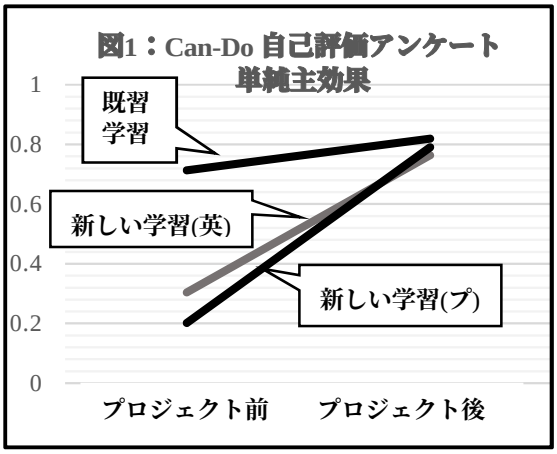
6 年生	事前		事後	
人数	平均	標準偏差	平均	標準偏差
62	27.11	5.42	31.48	3.07

	差の 95% 信頼区間		
t	下限	上限	r
-8.91**	-5.35	-3.39	.75

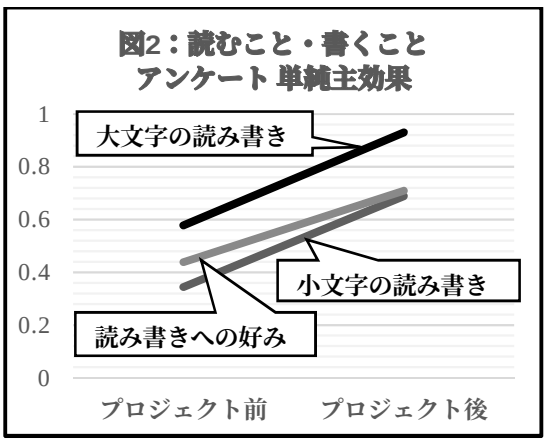
注記：** は p < .01 で有意差があることを示す

満点は 35 点

③「Can-Do 自己評価アンケート」は、因子分析で 3 因子に分かれ、分散分析の結果、交互作用が認められたので単純主効果分析を行った。既習学習：F (1, 183) = 7.37, p < 0.01, 0.70 Cronbach's alpha。新しい学習 (英語)：F (1, 183) = 137.43, p < 0.01, 0.84 Cronbach's alpha。新しい学習 (プロジェクト)：F (1, 183) = 225.42, p < 0.01, 0.67 Cronbach's alpha。3 因子とも事前事後 1%水準で有意差が認められた (図 1 参照)。



④「読むこと・書くことアンケート」は、因子分析で 3 因子に分かれ、分散分析で交互作用が認められたので単純主効果分析を行った。大文字の読み書き：F (1, 183) = 110.41, p < 0.01, 0.88 Cronbach's alpha。読み書きへの好み：F (1, 183) = 65.03, p < 0.01, 0.81 Cronbach's alpha。小文字の読み書き：F (1, 183) = 105.33, p < 0.01, 0.91 Cronbach's alpha。各因子 1%水準で有意差が認められた (図 2 参照)。



⑤「アルファベットクイズ」は、アルファベットの知識を測る問題 (問題 1：名前読み→文字、問題 2：音読み→文字)、内容関連語句問題 (問題 3：読み→つづり、問題 4：意味→つづり、問題 5：つづり→意味)、自分の名前を書く問題 (問題 6) を実施した。問題数は少

ないながら、どの種類の問題も到達度は高かった。ただし問 5「つづりから意味」を考える問題では到達度 79%という結果から、参加児童にとってつづりを意味につなげることが最も難しいことが分かった (表 3 参照)。

表 3：アルファベットクイズ

	種類	配点	到達度
問 1	アルファベット知識	6	96%
問 2		6	92%
問 3	内容関連語 (国名)	6	90%
問 4	内容関連語 (誕生月)	4	97%
問 5	内容関連語 (国名)	6	79%
問 6	名前 (ローマ字)	4	88%
合計		32	89%

④事後に追加した「読むこと・書くことアンケート」の自己評価項目と ⑤「アルファベットクイズ」の内容がほぼ同じ項目を比べると、名前を書くことについては自己評価よりクイズの正解率が低くなっていた。この比較から参加児童の「読む」学習より「書く」学習の定着に時間がかかると推測された (表 4 参照)。

表 4：自己評価とクイズの正解の比較

	Can-Do 自己評価	できる	正解
1	ローマ字で「自分の名前」を書くことができる	95.1%	88.0%
4	英語で「自分の誕生月」を読むことができる	86.9%	97.0%
6	英語を聞いてその国のつづりを指すことができる	78.7%	90.0%
7	英語のつづりを読んでどこの国かわかる	82.0%	79.0%

2016 年度 (第 1 次調査) と 2017 年度 (今年度) は、同じトピックのプロジェクトを実施しており、「読む・書く」指導のない 2016 年度と「読む・書く」指導を加えた 2017 年度で分析方法が同じ①②③から事前事後の平均値と伸び率の比較を試みた (表 5 参照)。

表 5：2016 年度と 2017 年度の比較

種別	① 聞くことクイズ (20 点満点)		
年度	事前	事後	伸び率
2016 年度	7.76	14.24	0.84
2017 年度	8.98	15.34	0.71
種別	② 活動アンケート (35 点満点)		
年度	事前	事後	伸び率
2016 年度	29.98	31.76	0.06
2017 年度	27.11	31.48	0.16
種別	③ Can-Do 自己評価アンケート(14 点満点)		
年度	事前	事後	伸び率
2016 年度	7.04	11.00	0.56
2017 年度	6.80	11.27	0.66

伸び率はプラスマイナス 0.1 前後の範囲での変化にとどまった。これを興味・関心が高かった「読む・書く」活動を加えたのに「聞く・話す」活動に変化がないと捉えるのか、児童にとって負荷が大きい「読む・書く」活動を加えても「聞く・話す」活動は高水準を保っていると捉えるかは、今後議論の余地があると言えよう。

⑥児童の自己評価に関して、まず毎回の児童の「振り返り」では、多くの児童が初めて本格的に学ぶアルファベット文字に高い興味や関心を示し文字への気づきが散見された。次に事後に実施した「行きたい国アンケート」では、「発表では準備したことが伝えられましたか」の問いに、児童は 4 件法で答え、その理由を自由に記述した。答えは、「とてもそう思う」43%、「まあまあそう思う」50%、「あまりそう思わない」7 %、「まったくそう思わない」0%だった。理由を KJ 法 (川喜田、1967) 的に

質的分析を行ったところ、自分の発表の様子やこれまでの努力の成果が最も多く、次に他者からの評価を上げ、多くの児童が満足感や達成感を示していた。しかし、発表の失敗による否定的評価も見られた。

⑦「担任アンケート」では、KJ 法 (川喜田、1967) 的に分析をすると、プロジェクト重視の英語活動と「読む・書く」活動を加えたことの 2 つに大きく分けられた。プロジェクト重視の英語活動については、ゴールが明確で、ポスターを使って説明するまでの学習がすべて連動していて無理、無駄がなく、分かり易い流れで授業をテンポよくすすめることができた。また、ポスターを使うことで児童も自信を持って発表できていた。活動で学んだ表現は、児童にとって必要なものばかりで、今回の発表だけでなく今後の学習にも有効だと感じた。

「読む・書く」活動を加えたことは、児童にとって中学校の学習につながる意味のある学習だが、やってみて改めて「書く力」に非常に個人差があることが分かった。このことを踏まえて、自信を持って自分の名前を全員が書けるよう指導していきたい。一方、各児童の名前や発表に必要な単語の書き方を丁寧に指導できるのは、ティームティーチングだからで、担任だけですべて行うとなると負担が大きい。

(2) 考察

研究目的のプロジェクト重視の英語学習の長所を生かしながら、「聞く・話す」活動に「読む・書く」活動を加えた 4 技能統合の可能性を模索した今回の実践では、活動プランの作成から、「すべての活動がトピックに関連付けられ、重層的にゴールにつながる」ことと「児童にとってゴールを達成するための意味のある 『読む・書く』 活動になること」をポイントに実践を行った。その結果、プロジェクト重視の英語活動によって、「聞く力」、「聞く・話すことへの意欲や自信」、「話すことへの状況的自信」についての参加児童への肯定的影響が認められた。まず「聞く力」と「聞く・話すことへの意欲や自信」に関しては、*t* 検定で有意な効果 (1%水準) が認められ、分析の信頼性も確認された。次に「話すことへの状況的自信」についても 3 因子 (既習学習・新しい学習 (英語)・新しい学習 (プロジェクト)) とも有意な効果 (1%水準) が認められ、分析の信頼性も確認された。つまり、今回のプロジェクト重視の英語活動「自分の行きたい国を発表しよう！」が、参加児童の聞くこと、話すことへ良い影響を及ぼしたことが分かる。

また今回の分析結果から、プロジェクト重視の英語活動は、「読むこと・書くことへの自信」や「文字認識」にも肯定的影響を及ぼすと考えられる。参加児童の「アルファベットクイズ」の到達度は高く、「読むこと・書くことへの自信」の意識も 3 因子 (読み書きへの好み・大文字の読み書き・小文字の読み書き) とも有意な効果 (1%水準) が認められたことから、プロジェクト重視の英語活動は参加児童の読むこと、書くことにも好影響を及ぼしたと考えられる。よって、参加児童への 4 技能への効果が認められる。

自己評価には個人差があることは考慮しなければならないが、量的分析に加えて質的分析からプロジェクト重視の英語活動の特徴である満足感や達成感を参加した多くの児童が得ていることが分かった。つまり、今回の実践はプロジェクト重視の英語活動の長所を生かした取り組みだったと考えられる。このことから、本実践の 4 技能統合のための指導方法「すべての活動がトピックに関連付けられ、重層的にゴールにつながる」と「児童にとってゴールを達成するための意味のある 『読む・書く』 活動になること」は、参加児童に有効に作用したと言えるだろう。よって、今後もさらに実践と改善を重ねていくこと

で、プロジェクト重視の英語学習が、2020年度施行の新学習指導要領の4技能5領域の目標達成に貢献できる可能性が十分あると結論付けられる。

(3) 今後の課題

一方今回の分析結果から、2016年度と比較して「読む・書く」活動を加えたのに「聞く・話す」活動に変化がなかったとの見方もできる。プロジェクト重視の英語学習による4技能統合への一層の効果という点では、今後の課題と言えるだろう。また、「書く」活動では個人的認知レベルを踏まえた丁寧な指導が必要になることも確かである。さらに、担任が懸念するように、今後教科化が進む中で、指導の質をどう担保していくのか、そのためにティームティーチングの強化や教員研修の量と質の向上など取り組むべき課題も多い。

＜引用文献＞

川喜田二郎 (1967).『発想法』東京：中公新書

文部科学省 (2014). 「今後の英語教育の改善・充実方策について　報告～グローバル化に対応した英語教育改善の五つの提言」. http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/102/houkoku/attach/1352464.htm

文部科学省 (2017). 「小学校学習指導要領」. http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/__icsFiles/afieldfile/2017/04/27/1384661_4_1.pdf

Cohen, J. (1992). A power primer. *Psychological Bulletin, 112*, 155-159.

Fried-Booth, D. L. (1986). *Project work*. Oxford: Oxford University Press.

Muijs, D. (2011). *Doing quantitative research in education with SPSS* (2nd ed.). Los Angeles: SAGE.

5. 主な発表論文等

［雑誌論文］(計1件)

①白土厚子、小学校英語教育におけるプロジェクト重視の英語学習の可能性－「読む・書く」指導を加えた移行期6年生の取り組み－、津田塾大学紀要、査読無、50巻、2018、113-128.

［学会発表］(計3件)

①白土厚子、小学校英語教育におけるプロジェクト重視の英語学習の可能性－「読む・書く」学習を加えたプランの試み－、日本児童英語教育学会(JASTEC)、2017.

②白土厚子、プロジェクト重視の英語学習の特徴を生かした4技能統合への実践－「読む・書く」指導を加えた移行期6年生の活動－、小学校英語教育学会 (JES)、2017.

③白土厚子、5年生への読み書き指導の実践－プロジェクト重視の英語活動を生かして－、全国英語教育学会 (JASELE)、2017.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

白土　厚子　(SHIRADO, Atsuko)

津田塾大学・学芸学部・助教

研究者番号：90782748